

日常生活の哲学と魔術的観念論

——ノヴァーリスのテプリッツ断片集について——

井戸慶治

Die Philosophie des täglichen Lebens und magischer Idealismus
——Über Novalis' Teplitzer Fragmente——

Keiji IDO

Abstract

Die Teplitzer Fragmente von Novalis kann man für eine in sich abgeschlossene, zur Veröffentlichung bestimmte Fragmentsammlung halten, obgleich sie tatsächlich nicht zu seinen Lebzeiten erschienen ist. Die vorliegende Arbeit ist ein Versuch, wichtige Fragmente davon zu interpretieren, die Zusammenhänge untereinander zu finden und dadurch die Bedeutung der ganzen Sammlung zu betrachten.

Im Mittelpunkt der Sammlung steht "die Philosophie des täglichen Lebens". Sie enthält das "Historische" und das "Philosophische", d.h. eine passive Haltung der Beobachtung und Beschreibung des Alltagslebens und eine aktive Haltung des Denkens darüber und des diesem entsprechenden Handelns. Und auf das letztere wird Gewicht gelegt. Also wird eine tätige Einwirkung auf Gegenstände z.B. auf die Gesellschaft, Stimmung empfohlen.

Die Frau ist auch eins der Hauptthemen der Sammlung. Sie wird als ein Wesen betrachtet, das voll von Widersprüchen ist und das Hohe und das Niedere zugleich hat, und trotzdem als Ganzes zusammenhängender ist, als der Mann. Aber wegen ihrer Unkalkulierbarkeit und Unbegreiflichkeit reizt sie ihn als "ein liebliches Geheimnis".

Die Philosophie des täglichen Lebens enthält auch die Kunst, im Gewöhnlichen einen höheren Sinn zu finden, oder besser gesagt, einen eigentlichen, dem Dinge zugehörigen Sinn wiederzufinden. Dadurch verwandelt sich z.B. das Essen in Genuß des Geistigen, Erwachen in das Bewußtsein der Planeten, Schlaf in Tod, ein Tag ins ganze Leben, tägliches Leben in Gottesdienst. So bezieht sich die Philosophie des täglichen Lebens auch auf das Religiöse, die Frömmigkeit im weiteren Sinn. Mit dieser Kunst kann man frisch und lebendig das tägliche Leben führen.

Eins der Teplitzer Fragmente erwähnt zum erstenmal den magischen Idealismus, aber dessen Inhalt wird merkwürdigerweise nirgends in der Sammlung erklärt. Literaturwissenschaftler haben ihn schon längst als den Kern der Philosophie von Novalis angesehen, und doch davon verschiedene Auffassungen gehabt. Mit einem Wort ist er höchstwahrscheinlich “tätiger Gebrauch der Organe”. Durch die sinnliche Organe (Sinne) nimmt man z.B. gewöhnlich äußere Dinge wahr, d.h. man nimmt sie in sich auf. Tätiger Gebrauch der Sinne ist ein umgekehrtes Verfahren. Man bringt hier durch seine Sinne etwas aus seinem Inneren in die äußere Welt hervor. In einem Fragment außerhalb der Sammlung steht, daß Künstler das tun. Der Musiker “hört heraus”, d.h. hört eine Komposition schaffend, oder komponiert und hört zugleich. Ebenso “sieht” der Maler “heraus”, d.h. sieht im Gedanken ein Bild malend. Es gibt auch den tätigen Gebrauch des Denkorgans usw. Und schließlich ist es Poesie, die mit diesem Verfahren aus dem Inneren eine neue Welt in ihrer Totalität schafft.

Magischer Idealismus legt für die Philosophie des täglichen Lebens einen theoretischen Grund, oder mit anderen Worten, das letztere ist die Anwendung des ersteren auf das Nächste. Auf diese Weise schließen sich bei Novalis ein scheinbar sehr spekulatives Denken und ein gewöhnliches, praktisches Leben ohne sichtbare Kluft aneinander an.

はじめに

1798年7月、ノヴァーリスは湯治のためテプリッツに赴く。亡き婚約者ゾフィーの家庭教師で彼の友人でもあった、ジャネット・ダンクールの死（5月18日）に衝撃を受け、体調を崩したためである。この地における滞在の後半の一月足らずのあいだに成立したのが、『テプリッツ断片集』である。

この断片集は、著者の生前に公開されることはなかったが、以下の諸点から見て、出版を予定されていたものであると思われる。まず第一に、各断片に著者みずからの手で番号が付されていること。第二に、はじめに置かれている若干の断片は、これから書くべき内容の概略を示しており、全体の構想のための覚え書きと考えられること。第三に、補遺を除いては、意識的に同じテーマの断片がなるべく隣合わないようにされていると思われることである。思いついたことをそのまま書きつけていったとすれば、同じテーマの断片がいくつか続くことがある方が自然である。実際それは、この直前の時期に書かれた『ロゴロギー』と題する稿によく見られるところである。しかし、『テプリッツ断片集』では、そういうケースはほとんど見られず、断片の配置に著者の意図が感じら

れる。このようなことから、『ノヴァーリス著作集』の中でリヒャルト・ザムエルが述べているように (II-516)¹⁾、この断片集は、『花粉』や『信仰と愛』と同様、それ自体で独立した一連の断片集と見なされるべきであろう。小論は、興味深い思想を含むと思われるこの断片集を読み解く一つの試みである。すべての断片に言及することはできないが、注目すべき若干のものを取り上げて、それらの意味と相互の関連について考察してみたい。

日常生活の哲学

ノヴァーリスは、テプリッツ滞在中の7月20日にフリードリヒ・シュレーゲル宛に書いた手紙で、今取りかかっている仕事について次のように述べている。「それ以外には、女性とキリスト教とふだんの生活が私の瞑想の中心的モナドだ。最後のものについては特に、君の同意を得られると思う。——なぜなら、この点で私は、まったく新しい立脚点を獲得したと信じているからだ。……私の日常生活の哲学において、私は（ヘムステルホイス的な意味での）道徳的天文学に到達し、目に見える世界における宗教の興味深い発見をした。」(IV-255) 実際、ここに書かれているさまざまなことどもが『テプリッツ断片集』のテーマであるが、その中心であると思われる「日常生活の哲学」(Philosophie des täglichen Lebens) とは何を意味するのだろうか。まずは次の断片を見てみよう。

「生活の哲学は、他に依存せず、みずからによって作り出され、私の思い通りになる生き方についての学を含み——生活術の学——あるいはそのような生き方を準備するための諸々の指示からなる体系の一部である。

すべての歴史的なものは、与えられたものにかかわる。——これに対して、すべての哲学的なものは、作られたものにかかわる。

しかし、歴史にも哲学的な部分はある。」(II-599-343-24)

ノヴァーリスの断片にはよくあることだが、この断片の前半と後半は、接続詞でつながれてはおらず、あまり関係がないように見える。しかし、この全体で一つの断片を形成しているのはそれなりに意味があることなのであって、そ

1) ノヴァーリスの著作からの引用は、以下のテキストによる。Novalis. Schriften. Die Werke Friedrich von Hardenbergs. Hrsg. von Paul Kluckhohn und Richard Samuel. Stuttgart. Bd.1 1977 (3. Auflage). Bd.2 1981 (3. Auflage). Bd.3 1983 (2. Auflage). Bd.4 1975 (2. Auflage). なお、引用箇所は、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で示し、断片などの番号がある場合には、さらにその後にアラビア数字で示す。引用部分の下線はすべて原著者による。

の関係を考えるのは読者に委ねられている。読者の側の思考活動を喚起するというのが、ロマン派の断片の著者がこの形式を選んだ一つの意図なのである。前半と後半の連結点は、「哲学(的)」という言葉、および下線を引かれた「みずからによって作り出され」(selbstgemacht)、「作られたもの」(ein Gemachtes)という言葉であり、これが理解の手がかりとなる。

この断片からすれば、「生活の哲学」(Philosophie des Lebens)とは、漫然と生きることは正反対の生き方をめざすものであろう。それは、自分が考えたとおりの生活を実現し、生を自分自身で支配すること、言い換えれば外部からの影響に左右されることなく生きることを目的とする。ここでいう「哲学」は、単なる思弁にとどまらず、考えたことを実践しようとする傾向も持っていると思われる。それは、「生活術の学」(Lebenskunstlehre)の一部をなすのである。哲学的なものは「作られたもの」にかかわると言われているが、この「作られたもの」は、文脈上、他からではなく「主体みずからによって作られたもの」と考えるべきであろう。これに対し、歴史的なものは「与えられたもの」(ein Gegebenes)にかかわると言われるとき、それは、上とは逆に他から与えられたもののことである。歴史という言葉は、過去の事実そのものの集積であり、またそのような事実の記述でもあるという、二様の意味を持つが、ここでは後者の意味で使われていると思われる。歴史記述は、すでに起こったことども、既存のものを対象とする。本論に戻って、個々の人間の生活を考えるとき、それは多くの場合、過去の生の記憶と反復であるか、さまざまな外的事情によって「与えられたもの」でしかない。そこでは、歴史記述におけるのと同様、主体は受動的な立場にある。しかし、それが「哲学的」になるとき、上述したような能動的な生が実現される可能性を持つ。ふりかえって、そもそも歴史記述も、実在したもの、すでにあったものを扱うだけではなくて、それについて考察し、新たなものを作ってゆくという「哲学的」要素を持っていないわけではないのであり、それが断片の最後の文の意味であろう。

このように、人間の生活は「歴史的な」要素と「哲学的な」要素を合わせ持つ。そしてこの断片集全体は、その両方の要素とかがわってゆくことになる。前者は、さまざまな生活局面をつぶさに観察し、記述することである。後者は、こうして記述されたものをもとにして、考察し、実践しようとすることである。そして、最終的には、未来の生活を作り出し、それを自分で制御してゆくことが「生活の哲学」の目的である。このような意味において、この断片は、断片集全体で述べられているさまざまなことを包括する理念を、それとなく示したものであるということが出来る。そして「日常生活の哲学」の重点は、未来を

志向する「哲学」の能動的な部分に置かれているのである。

社交と気分

人づきあいは日常生活の重要な部分の一つであるが、これを扱った断片を見てみよう。

「自分の方から仲間を必要としない人だけが好漢であると言える。このような人だけが、仲間に頼らないでいられるようになる。彼は仲間を『持っている』と言うことができ、彼らをいろいろなやり方で刺激し、自分の思うがままに遇することができる。他の人々は、彼に持たれているのであって——彼らが彼を持っているとは言えないのである。私が仲間を刺激したいと思うなら、彼らが私を刺激しているようではいけない。仲間の方が私とつきあいたいと思うくらいでなければならず、私は彼らの状況に合わせて自分を気分づけることができなければならない。そのような才能を、一般に機転と呼ぶことができよう。私はただ、自分を捧げ、楽しんでもらい、思いを伝えようという、受動的な意志さえ持てばよいのである。」(II-604-369)

ここでも、能動的な態度と受動的な態度が対比されて、前者の方が是とされている。つきあう相手に「持たれて」いて、相手を「持って」いないようなことではいけないというのである。仲間がいなくても一人でやってゆけるような、他者に求めるところのない人間こそが、社交に対して自主的な立場をとることができ、自分の方から仲間に積極的に働きかけることができるとされる。面白いことにそれはでしゃばって自分を開陳したりするようなことではなく、むしろ一見それとは逆の態度によって示されるという。「自分を捧げ、楽しんでもらい、思いを伝えようという、受動的な意志」を持つというのがそれである。意志というものが能動的であるかぎりにおいて、下線部は一つの形容矛盾であろう。しかし、「受動的」なのは、ただ周囲との関係においてだけであって、自分自身に働きかけて自由に制御するという精神の態度においては、この意志はやはり能動的なのである。「彼らの状況に合わせて自分を気分づける (stimmen)」ということについても同じことが言える。社交と友情はロマン派の人々にとってとりわけ重要なものであった。リカルダ・フーフは、『ロマン的性格』と題する章で、この stimmen という言葉を用いて、彼らの社交生活を描写している。²⁾

気分の研究とその実践への応用は、この断片集の一つのテーマでもあり、比

2) Ricarda Huch: Die Romantik. Ausbreitung, Blütezeit und Verfall. Tübingen, 1951, S.127.

較的長い二つの断片がこれを扱っている。断片87では、気分は、「漠然とした感覚」(unbestimmte Empfindungen) (II-611-406)であるとされ、それが人を幸福な気持ちにさせると述べられている。そして、はっきりした対象に向けられる思考や感覚、すなわち明瞭な意識は、根源的なものである気分から派生したものだとされている。さらに断片77では、何か作業をしているときには、はじめに「努力」をおこなうことによって、ある種の気分を人為的に生じさせることができ、そのような気分の中で仕事は大いにはかどるのだという。

「これによって生じうる適切な気分の中では、すべてがひとりでにうまくゆく。……完璧な気分の中では、すべての観念が等しく現前している。……われわれは、まさしくオリンポスの頂にいて——世界は足元にある。このような気分の中では、自己支配もおのずから進捗する。」(II-609-396)

これらの断片については別の箇所ですく論じたので、³⁾ 深くは立ち入らないが、ここでも上で見たのと同様に、観察し、記述する姿勢と、考察をもとに対象に対して能動的に働きかけようとする姿勢、言い換えれば、生に対する「歴史的な」態度と「哲学的な」態度を確認することができる。

女性論

日常の人づきあいの中できわめて大きな部分を占めるのは、女性との接し方であろう。『テプリッツ断片集』の中で女性について論じている断片は比較的多い。それらのすべてではないにしても、かなりのものに共通している考え方は、女性というものが諸々の矛盾を持つ存在であるということだ。まず断片17の補遺から見てみよう。

「女たちの教養の両極端は、われわれのそれに比べてはるかに驚くべきものであるという事情は、彼女らの優越性を裏づけるものではなかろうか。最低の卑劣漢と最も優れた男の違いは、ひどいあばずれ女と気高い婦人の違いほど顕著ではない。」(II-616f.-428)

振れ幅の大きさは容量の大きさを示すという意味で優れているということなのであろうか。あるいは、安定した状態よりも極端から極端へ揺れ動くことを好むロマン主義の傾向の一端がここにも表わされているのだろうか。次の記述も同様の主旨だが、このような矛盾を抱えているにもかかわらず、それでもなお女性は男性よりも全体としての統一性を保っているということが述べられてい

3) 拙著：『ノヴァーリスと気分について』徳島大学教養部紀要（人文・社会科学）第23巻 1988 165ページ以降

る。

「女たちは、その頼りなさにおいても——しっかりしていることにおいても——また奴隷の素質においても——暴君の素質においても、われわれ以上である。——このように、彼女らはまったくわれわれの上にいるか下にいるかであるが、それにもかかわらず、われわれよりもまとまっており、分ちがたい存在なのである。」(II-617-428)

同様の表現を用いた次の断片では、この矛盾した性格が魅力と感じられるということが述べられている。

「他の人々に対して最も輝かしい美德の具現者でありながら、彼らにとって最も刺激的な情欲の的であり——すべての人に対してどこにおいても崇拝される暴君であって、しかも彼らに対して崇拝をおこなう奴隷である、このような両面を一身に兼ね備えた女がいるとすれば、それは彼らにとって最も愛すべき女であろう。」(II-606-379)

次の「補遺」においても、観点は違うがこのような性格が肯定的に見られている。というよりも、神秘化されていると言った方がよいだろうか。

「女たちは、二乗することができず、ただただ接近することによってしか発見されないという点で、無限と似てはいないだろうか。彼女らは、絶対的にわれわれの近くにいなながら、いつも捜されているという点で——絶対的に理解可能でありながら、その実理解されないという点で、また絶対的に必要でありながら、たいていはいなくてもやっていけるという点で、至高のものと似てはいないだろうか。そして、見たところ非常に子供っぽく、平凡で、無為で、遊んでいるみたいだという点で、高次の存在者と似てはいないだろうか。」(II-617-428)

女性の持つこのような矛盾の一つの原因として、ある断片では「身体と魂が同時に彼女らを触発する。」(II-603-362)ということが挙げられている。つまり、感覚的な要求と精神的、理性的な要求を一度に満たそうとするということである。

「彼女らも、統一性を好む。——そこであのような両方の要素が混在した楽しみ方に無限の価値をおく。——このような趣味は、すべてのものに適用される。——ベッドは柔らかくて——しかもその形と刺繍が美しいものでなければならぬ。——食事はおいしくて、しかも活力を与えてくれるものでなければならぬ。」(a.a.O.)

しかし、女性はこのように両極端を合わせ持つのみならず、逆に中庸、平凡を好む面も持っていることも指摘される。

「普通の女らしさの規範というものは、その時々々の生活の限界を非常に正確に感

じとり——用心してこの限界を越えないようにする。——それゆえに、彼女らの普通さは賞賛される。——世慣れた実践家。洗練、美食、真実、美德、情愛も、度を越せば彼女らには好まれない。——彼女らは、卑俗なものの交替を——普通のものの新しさを愛する。——新しい理念ではなく新しい服を愛する。——総じて単調さを——表面的な刺激を愛する。彼女らはダンスが好きだが、特にその軽やかさと無内容と感覚性のゆえである。うますぎるしゃれは彼女らには不快である。——すべての美しいもの、偉大なもの、気高いものも。平凡で劣悪でさえある読み物、俳優たち、劇など。これが彼女たちの領分だ。」(II-613-416)

これらの断片から明らかになることは、女性という対象をあまり価値判断をまじえず、冷静に、ありのままに観察し、描こうとする著者の態度であろう。これは、フランスのアフォリズム作家たちの辛辣な見方とも違ひ、女性の欠点をいったんは認めながら、それを好意的な解釈へと転換するゲーテの見方とも違っている。ここにも、上述のような「歴史的な」記述の態度を見出すことができる。しかし、それだけではなくこの断片集では、女性を「愛すべき秘密」(II-617-428)として神秘化するような傾向も見られる。次の断片には詩的な気分すら漂っている。

「乙女をあのようによも言えぬほど魅惑的なものにしてある美しい秘密は、母性の予感であり——彼女の内にまどろんでいて、そこから開けゆくことになる未来の世界への予感である。乙女は、未来をありのままに写した似姿である。」(II-618-430)

このような神秘化は、次の部分で触れる、われわれがふだん接しているものの中に高い意味を見出すという、「日常生活の哲学」の一つの態度ともかかわっている。いずれにせよ、全体として見れば、この断片集の女性論は、次の断片からもわかるように、どちらかと言えば女性を賛美しようとしているように思われる。

「炭とダイヤモンドは同じ物質だが——いかに違っていることか。——男と女の場合も同様ではなかろうか。われわれは土くれであり——彼女らは、この同じ土くれからできた瑪瑙とサファイアなのだ。」(II-621-440)

食事・覚醒と睡眠・一日の時間など

断片8の補遺とされているいくつかの記述は、日常生活のさまざまな局面を扱っており、レトリックの上でも注目すべきものがある。

「食べることは強調された生にすぎない。食べる——飲む——呼吸するという三

つの行為は、物質が固体と液体と気体の三つに分類されるのに対応している。呼吸するのは体全体だが——食べ、飲むのは唇だけである。——唇はまさに、精神が与えるか、それ以外の感官を通して感受したものを、再びさまざまな音にして仕分ける器官である。唇は、人づきあいにもたいへん重要である。それは、口づけを受けるのにいかにふさわしいことか。ゆるやかに盛り上がった柔らかい隆起はすべて、触れてみたいという願望の象徴である。このように、自然の中にあるすべてのものは、形象でもって控え目に享受へとわれわれをいざなう。——だから、自然全体はおそらく女性であって、処女であると同時に母でもあるのだろう。」(II-618-429)

この断片には、諸々の観念の間でのごく自然な連想の流れがある。そしてこれらの観念の中に、断片集全体で扱われているテーマ（食事、社交、女性など）が散りばめられてもいる。

次のものは、内容的なつながりを持つ一連の断片の始まりとなる。

「光は、真の覚醒状態の象徴である。・・・それゆえ昼は遊星の意識であり、太陽が、神のように永遠の自己活動のうちに中心を生气づけているあいだ、遊星たちは次々とその一つ目を閉じ、時間の長短はあるがその涼しい眠りのうちに新たな生活と観照のために活力を回復する。そういうわけで、ここにも宗教がある。——というのも、遊星たちの生活は太陽の礼拝としか思われなからだ。となるとここでもわれわれを迎えるのは汝だ。——パルシー教徒の太古の無邪気な宗教よ。——そしてわれわれは、汝のうちに宇宙の宗教を見出すのだ。」(II-619-432)

ここでは、大じかけのアナロジーの実験がおこなわれているかのようである。天体の世界と人間界の対応という図式が前提となっていることは明らかであろう。太陽の周囲をめぐる遊星の特定の部分は、それぞれ時間の違いはあるにしても昼と夜の状態を交互に繰り返すのだが、それが人間の意識と睡眠の交替に比較される。太陽は、みずから無限に生命力を産み出し、与え続けるものとして、神に比せられる。そのとき、光は *Besonnenheit* を象徴するものとなる。文脈上「覚醒状態」と訳したが、この言葉は一般に、自分の精神を制御している状態、いざというときにもうろたえずに事態に対処できる能力を意味し、「思慮深さ」「沈着さ」などと訳されることが多い。精神的な覚醒状態としての *Besonnenheit* の概念は、ノヴァーリスにとって重要な意味を持ち、『花粉』でも何度か取り上げられていた。そしてこの断片集でも、その重要性をそれほど減ずるわけではない。日常生活を律してそれを自分の考えたとおりに再構成してゆく「生活の哲学」にとっては、ある意味で目覚めていることが不可欠だからだ。

光を精神的なはたらきの象徴とするのは、とりわけ西洋文化の伝統の中では非常にしばしば見られることである。ただ、ここで注意すべきことは、このようなアナロジー全体が、単に興味を惹くためのレトリックではなく、根本においてはノヴァーリスの思想の表われでもあるということだ。人間と外部の世界、あるいは世界の中のさまざまなものが照応し合い、相互に象徴し合うような関係にあるという思想である。この後に続くさまざまな象徴関係も、この考え方を基礎としている。

さて、上の断片の終わりで「太陽の礼拝」と拝火教が言及されるが、これは何を意味するのであろう。われわれの日常生活においても、光、すなわち目覚めや精神的な活力を与えてくれるような崇敬の対象が必要だということではないだろうか。それが何らかの宗教であるか否かにかかわらず、崇高な存在のことを思い、敬虔な心情を抱くということが、平凡な日常生活に埋没してしまわないための一つの手だてであると言えるのではなかろうか。すぐ後の断片はこのテーマを引き継いでいる。

「対象が大いなるものであれば——それに対する愛はますます大きなものとなる。——絶対的な対象を迎えるのは、絶対的な愛だ。君のもとに帰ってゆこう。気高きケプラーよ。君の高貴な心は、精神化された道徳的な宇宙を作り出した。われわれの時代には——一切の生命を奪い、低きを高めるのではなく高きを低め——みずから人間精神を機械主義の法則にしたがわせることが賢明だと思われるというのに。」(II-619-433)

遊星たちが、生命力と精神のはたらきの根源であるような太陽のまわりを、小数の単純な法則に厳格にしたがって回っているのは、神的なものを心の中心に据えて、道徳的に生きる人間の模範のように思われたのかもしれない。ケプラーが賛美されるのは、遊星の運行法則の発見により、上述のようなことを明らかに示したからであろう。後半の部分には、生き生きとしたものや感情を軽んじて悟性のはたらきだけを尊ぶ当時の啓蒙主義や、すべてを物質に還元しようとする極端な唯物主義などへの批判が含まれていると思われる。⁴⁾ 日常生活における宗教的なものについては、のちに改めて述べる。

「われわれと同じく、星たちも、照明と暗黒の交替のうちに漂っている。——し

4) 『ザイスの弟子』では、分析的な思考法しか持たない自然研究者について、次のように述べられている。「自然研究者たちは鋭利なメスで切断して、諸々の部分の内部構造や関係を探求しようとした。彼らの手元では、親しげな自然は死んでしまい、ただ瘻撃しているなきがらを残したにすぎない。」(I-84)

かし、われわれは、星たちと同様に、暗闇の中にあっても、みずから光を発したり、光を反射したりする仲間の星たちの、慰めを与える希望に満ちたほのかな光に恵まれてもいる。」(II-619-436)

これは、先ほどのものの少し後に置かれているがやはり断片8の補遺である。われわれは、太陽のような神的な存在からだけではなく、仲間の人間たちからも精神的な刺激を受けることができるということなのだろう。ここでは遊星のみならず、太陽以外の恒星や、衛星のことも言われているらしい。人間相互の連帯感のようなものも感じさせる断片である。

次の断片は、天体の比喻から離れて食事を扱っている。食事もまた日常生活のなくてはならない部分であるが、ノヴァーリスはそこにとりわけ精神的なものの享受の象徴を見る。

「すべての享受、獲得、同化は食事である。・・・それゆえ、すべての精神的享受は、食事によって表現することができる。——友情において、ひとは実際友を食べ、あるいは友を糧として生きる。精神を肉体に置き換えて——友を偲びつつ食事をするとき、大胆で超感覚的な想像力を働かせて、一口ごとに友の肉を食べ、一飲みごとに友の血を飲むことは、真の形象表現である。」(II-620f.-439)

一見異様に感じられる表現であるが、聖餐式のことを考えると、このような発想はキリスト教文化の伝統の中ではそれほど突飛なものではないのかもしれないと思われる。日々の食事は、身体の健康の維持や増進のため、あるいは美食の享樂のためにおこなわれるのが普通であり、精神的な意味があるとすればせいぜいそのときになされる会話を楽しむくらいなものであろう。しかしここでは、そのような必要から繰り返されるお定まりの習慣としての食事に、特別な高い意味を付与することが述べられている。友人のことにかぎらず、食事一般を精神的なものを自分の中に取り入れる行為と考えるのである。例えば、われわれが食べたり飲んだりしているものは自然の産物であるが、それが自然のうちに存在する神であると考え。こうして、俗なものであるはずの食事が、いつも何か聖なるものとなる。

「かくてわれわれは、自然の守護神を日々享受する。こうして、あらゆる食事は追想の食事となり——身体を維持するための食事であると同様、魂を養う食事ともなり——この地上における浄化と神化の神秘的な手段となり——絶対的に生命に溢れた存在との生き生きとした交流の手段となる。」(a.a.O.)

このように日常的なものの中に高い意味を見出すこともまた「日常生活の哲学」の一つの要素であるように思われる。

同じく食事について触れた次の断片の表現を見てみよう。

「食事の時間は、一日のうちで最も注目すべき時間であり——ひょっとすると一日の目的であり——花であるかもしれない。朝食はつぼみである。古代の人々は、この点においてもわれわれより生活の哲学に通じていた。——彼らは、朝食以外には一度しか食事をしなかったのである。——しかも、仕事をすませたのち夕方頃に。二度の食事は興味を薄れさせるからだ。」(II-621f.-441)

さらに、「生活の真の教養学」(ächte Bildungslehre des Lebens)によれば、食事全体は時間的に曲線を描かなければならないという。

「最も軽い料理にはじまり——しだいに重くなり——再び最も軽いものに終わる。食事の時間は長くなければならない。——消化がなされる間中。——そして最後はまどろみに終わる。」

こうして、きわめて自然な流れのうちに、テーマは次の断片で日常生活の次の局面である「睡眠」へと移行する。ここでもアナロジーの関係が見出される。睡眠に対比されるのは死である。

「眠りは死に似ている。死よりも短いけれども——頻繁な眠り。」(II-622-442)

睡眠が死に対してのように、一日の生活は人生全体に対してしている。そして、ここにもまた、太陽が天球で描くのと同一ような曲線が認められるという。⁵⁾

「力強く多様な生命に満ちた未来への展望は、すべて朝の展望である。太陽の詩的な曲線。日々の生活は、昼のように、また一個の終始ある劇のように——悲哀のうちに——しかし高まる希望とともに終わる。朝が素朴であるように、夕暮れは感傷的である。朝は厳格で、多忙でなければならぬ。——夕暮れは豊饒でなければならぬ。仕事も正午頃に増加し、夕食の頃にはまた少し減少しなければならぬ。朝早く人づきあいはいけない。ひとは朝には若く、夕暮れには老いる。夕暮れにはいつも遺書をなし——自分のことに方をつけねばならぬ。」(a. a. O.)

この一節は、「一期一会」とか「死を思え」という言葉の持っているような意味

5) 断片89では、次のように述べられている。

「季節、一日の時間、生活、運命は、十分な注目に値することだが、すべてまったくリズム的であり——韻律的であり——拍子を持っている。すべての手仕事や技芸、すべての機械において——有機体やわれわれの日々のつとめにおいて——いたるところに——リズム——韻律——拍子——メロディーがある。われわれがある程度熟練していることなら何でも——われわれは気づかずにリズム的におこなっている。——リズムはどこにでも見られ——どこにでも入り込んでくる。」(II-612-408)

を、これらの表現ほど直接的ではないが、穏やかで全体的な効果によって伝えている。つまり、この断片は、一日一日をそれぞれ必ず終わりの来る人生のように見なすことによって、けじめをつけながら真摯に生きてゆくことを勧めているというよりも、むしろそういう目で見ることによって、日々の生活というものが何か厳粛で豊かで意味深いものになったような感じを読む者に抱かせることをねらっているように思える。補遺全体に漂っている詩的で宗教的な気分によって、そのような感じはさらに増幅される。

宗教的なもの

上述したように、「日常生活の哲学」は、生活の中のさまざまなことどもの意味を考え、それらに宗教的儀式のように象徴的な意味を持たせたり、平凡なものの中に高いものを見出したり詩的な意味を感じ取ったりすることからも成り立っていた。このような操作にとっては、信じるという心のはたらきが大きな役割を果たすと思われる。『テプリッツ断片集』の中では、次のようなことが述べられている。

「ある企てや行為が困難か容易か、許されているか否か、可能かどうか、うまくゆくかどうかというようなことについての、われわれの思いや信念や確信は、現実にこれらのものを規定する。——例えば、あることが厄介で有害なものだと私が信じれば、それは幾分そのようなものになる。知識の成果でさえ信念の力にもとづく。——すべての知識の中には信念がある。」(II-599-344)

この、信じるということと密接にかかわっているのが、宗教であろう。先に述べたように、宗教ないし宗教的心情も、この断片集では重視されている。

「ふだんの生活は——あたかもヴェスタ神に仕える祭司のおこなうような——勤行である。われわれの仕事は、聖なる神秘の炎を絶やさぬようにすることでしかない。……その配慮の仕方は、もしかすると最高のものに対するわれわれの誠実さ、愛、慎重さの尺度であり——われわれの本質の性格を表わすものではなかろうか。——職業に対する忠実さはどうか。それは、われわれの宗教性の——すなわちわれわれの本質を象徴する印ではないか。」(II-608-392)

ヴェスタは家庭の竈とその火を司る古代ローマの女神である。かつて、ヴェスタの神殿では、女祭司たちによってその聖なる火が守られていた。ヴェスタ神の祭司のような勤行とは、日常生活、とりわけ日々の家庭生活を、敬神の念からおこなわれる宗教上の勤めのような気持ちでいとなむということを比喩的に言ったものであろう。そして、自分自身の次にもっとも身近なものとしての家庭に対する態度によって、「最高のものに対するわれわれの誠実、愛、慎重さ」

やわれわれの人となりか推し量られるということであろう。また同様に、われわれの活動の中で最も重要なものである職業に対する態度もまた、「われわれの本質」であるところの心情の奥底にある宗教的心情を示すものと言われている。繰り返すが、ここでは文字どおりの宗教のことを考える必要はない。一般に、われわれが何かに対して抱く敬虔で厳粛な気持ちとか、畏怖の念といったものを考えた方が、この断片の普遍的な意味を理解する上で有益であろう。日々の生活や仕事を、単調に繰り返されるつまらぬことと決めてしまわずに、その中にも時として尊ぶべきもの、神聖さを感じることによって、生き生きとした気持ちで暮らすことができる可能性が、ここで呈示されているのである。

「われわれの生活全体は、勤行である。——」(II-609-397)

この断片は、短いがゆえに印象的で、格言の趣があるが、ダッシュが引かれていることから、後を続ける予定であったことがわかる。おそらくこれも、先ほどの断片と同じ主旨のことを述べようとしているのであろうが、断片集全体にある一つの傾向を一言で言い表しているかもしれない。それは、日常生活に対する厳粛な態度である。

「心は、世界と人生を解く鍵である。われわれがこのようなよるべない状態に生きているのは、愛するためであり——他者に恩義を感じるためである。不完全さを通して、われわれは他者の働きかけを受け入れられるようになる。——そして、この他からの働きかけこそが目的である。病気のときに、われわれを助けるべきであり、また助けることができるのは、他者しかない。かくて、キリストはこのような観点から、もちろん世界を解く鍵である。」(II-606-381)

この断片は、最初の文と最後の文の意味がわかりにくい。文脈からすれば、「世界と人生」という言葉は、ここでは特に人間相互の関係にかかわっているようだが、ノヴァーリスの場合には、それが宇宙における万物相互の関係へと普遍化されるのであろう。「働きかけ」(Einwirckung)という言葉で表わされるそのような関係は、「心」の作用によるのであり、具体的には他者に好意を持ったり感謝の念を感じたりすることであるが、そのようなことが起こるのはとりわけわれわれの「よるべない状態」や「不完全さ」「病気」によってだというのである。このような他者と心を通じ合わせることが、われわれにとって最も重要な「目的」であるとするならば、それを実現する契機となる、われわれの生活における苦しみや欠陥は、これまでとは違った意味を持つようになるだろう。この断片は、ふだんは否定的にしか捉えられていないわれわれの「不完全さ」の再評価の試みであると言ってもよいだろう。それはまた、宗教的なものに目を開くきっかけともなるであろう。さらに、贖罪死によって示されるキリスト

の慈悲心は、上述のような「働きかけ」の典型であり、「心」の象徴とも言える。

宗教や病気に関する断片は、ノヴァーリスの死の直前に書かれたものの中に多く見られるが、この断片集にもその萌芽がみとめられる。彼がこの時期に、身近な人々の死に触発されたためであろう。病気に関しては、特にブラウンの「刺激理論」との関係で論じている断片がいくつか見られるが、それを扱うのは別の機会に譲る。

魔術的観念論

『テプリッツ断片集』には、宗教的なことと並んで、魔術に言及している断片があるが、それらもまた、これまで述べてきたような「日常生活の哲学」の考え方を暗示するものであろう。

「魔法をかけることは、すべて人為的に妄想を引き起こすことである。すべての情熱は、魔法をかけられた状態である。——魅惑的な乙女は、ひとが思っている以上に本当の魔法使いだ。」(II-601-355)

「最も偉大な魔術師は、他人と同時に自分自身をも魔法にかけることができ、自分でかけた魔法をまるで馴染みのない、自動的な現象のように感じる魔術師であろう。——われわれもそうなればよいのだが。」(II-612-407)

この断片集にかぎらず、その前後の時期に書かれたものの中には、魔術に関するものが目につくが、それはこの当時、ノヴァーリスがいわゆる魔術的観念論の構想を練っていたからであると考えられる。事実この断片集の中にも、次のような記述がある。

「アスムスとリーニュとヴォルテールの似ている点と似ていない点。ヤコービも、超越論的経験論者の一人である。経験論者とは、その考え方が、外界と運命の結果であるような人のことであり——受動的な思索家であり——そのような人にはそれなりの哲学が与えられる。ヴォルテールは、純粋な経験論者であり、かなり多くのフランスの哲学者もそうである。——リーニュは、ほんの少しだけ超越論的経験論者たちの方に傾いている。彼らは、独断論者たちへの過渡的段階をなす。——独断論者から夢想家へ——あるいは超越論的独断論者へと進み——それからカントへ——そこからフィヒテへ——そしてついには魔術的観念論へと至る。」(II-605-375)

この断片において、「魔術的観念論」という言葉がはじめて現れるのであるが、不思議なことに『テプリッツ断片集』の中にはこれ以外に明確な説明がない。この断片でも、経験論から独断論（实在論）を経て観念論に至る哲学史の流れ

の最後に位置する最も新しい思想が魔術的観念論だということが述べられているだけで、内容については触れられていない。

ここで、その魔術的観念論とは本来何を意味するのかということについて、この断片集以外のさまざまな記述を見ながら、簡単にまとめてみたい。この印象的な言葉は、かつてノヴァーリスの思想を代表する標語のように用いられていたが、彼自身の書いたものの中では実はそれほど多くは見られない。そして、この言葉が具体的にどのような思想をさしているかということについても、著者自身によって詳述はされておらず、それゆえに子細に見るとさまざまな説があった。ただ、諸家のほぼ一致するところは、魔術的観念論が、この少し前に書かれた手紙と断片に見られる、「きわめて重要で素晴らしい理念」「一切を変える素晴らしい理念」「非常に実り豊かな理念」という言葉で表わされているものと同一視されるということである。該当の部分を引用しよう。

(1798年5月11日、フリードリヒ・シュレーゲル宛の手紙。)

「私はかなり勤勉で、かなり多くの思いつきを持っている。今手を加えようとしているある理念があるが、それを発見したことを私は自慢したいくらいだ。それに関して何かを理解できるものになりしだい、君に知らせよう。それは私にとって、フィヒテの体系にきわめて強力な光を投げかける、非常に素晴らしい、実り豊かな理念——この上なく実践的な理念であるように思われる。」(IV-254) (『テプリッツ断片集』の少し前に書かれた断片)

「非常に——非常に多くのものが、きわめて重要で素晴らしい一つの理念とかかわっている。・・・

先に進めば非常に多くのものはなくてすませるようになり——かなり多くのものが新たな様相を呈するであろう。——そうならば、あの一切を変える素晴らしい理念を詳述する前に、細部の推敲などするのではなかったと思うことだろう。」(II-595-318)

これらの記述を手がかりに、この「理念」の内容を推測してみよう。まず第一に、「魔術」という言葉や上の引用の表現から考えて、それはあまり地味なものではなく、人目を惹くような特異な考え方であろうと思われる。第二に、この「理念」は、ノヴァーリスの思考の中心的な対象であったのだから、当然、同じ時期においてかなり多く言及されている事柄のはずである。第三に、それはフィヒテ哲学に関係する、非常に「実践的な」理念でなければならない。これらの条件をすべて満たすものは何かと考えると、それはノヴァーリスの表現を借りて一言で言うならば「器官の能動的使用」(tätiger Gebrauch der Or-

gane) ではないかと思われるのである。⁶⁾

では、「器官の能動的使用」とは何か。例えば感覚器官（感官）のはたらきは、外界のものを知覚することであり、言い換えれば受け入れるという受動的な作用である。そこには、外から内へという方向性がある。「能動的使用」とは、感官を逆に内から外へと働きかけさせるやり方である。理屈の上ではそうだが、これは具体的に何を意味するのか。『テプリッツ断片集』に先立つ時期に書かれた『ロゴロギー』の中のある断片 (II-573ff.-226) においては、芸術家が

6) フーゴー・クーンは、次のように述べている。

『魔術的観念論』とは、ノヴァーリスにとってはまさに『能動的な』操作であって、そこにおいては自我が経験的自我として、世界の存在形式を実践的に行為しつつ絶対的自我の『理念』として自我の中に定立する（『観念論』）のみならず、今や経験的にも、自我のすべての器官を用いてこれを生産するのである。（『魔術的』）（Hugo Kuhn: Poetische Synthesis oder ein kritischer Versuch über romantische Philosophie und Poesie aus Novalis' Fragmenten (1950/51). In: Novalis. 2., erw. Aufl. Darmstadt, 1986, S.220.）さらに彼は、ノヴァーリスのさまざまに揺れ動く思弁的世界の中には、一つの根本思想のヴァリエーションしかみとめられないのであって、その思想が「器官の能動的使用」であると述べている。（a.a.O.）

それ以外の二つの解釈を挙げておく。カール・ハインツ・フォルクマン＝シュルックは次のように述べている。本来、自然の中にもわれわれと同じ精神があるはずなのだが、その精神は、人間が自然を物質としてのみ対象的に捉えることによって閉じこめられている。芸術、とりわけポエジーにおける言語は、詩的な言葉の力によって、この自然の精神を解放し、そこではじめてわれわれは自分の中から出て行った精神と出会うことになる。二つの精神はもともと同じものであったのだから、それは自己との邂逅でもある。「対象的な自然が、ポエジーによる自己邂逅という予期せざる、思いがけない豊かさに変容することが魔術的観念論の本質である。」（Karl Heinz Volkmann-Schluck: Novalis' magischer Idealismus. In: Die deutsche Romantik: Poetik, Formen und Motive. 3. Aufl. Göttingen, 1978, S.48.）それゆえ、魔術的観念論は「ポエジーになった形而上学」（S.52.）とも呼ばれている。この解釈は、「魔術的観念論」の最終的な形を説明してはいるが、ポエジー以外の要素をほとんど無視している点で不備である。

テオドル・ヘリングは、ノヴァーリスにおける魔術的なもの一般について、一つの章で取り上げて分析しているが、魔術的観念論の本質を具体的に説明するまでには至っていない。彼によれば、魔術的観念論の特徴は、それが同時代の観念論哲学者たちの哲学のように、ある一領域のことだけにかかわるのではなく、全面的なものであり、人間のすべての活動と能力と存在領域のより高い段階をめざすものだという点である。さらに、そこにおいては「魔術（的）」という言葉が、「異常なもの、非日常的なもの」という通常の意味ではなく、むしろ、普通のもの状態を高めること、それが本来持っていた全体性を回復させるという意味合いを持っていることが指摘されている。（Theodor Haering: Novalis als Philosoph. Stuttgart, 1954, S.364ff.）

これをおこなっていると述べられている。長いので要約と引用を交えつつ説明しよう。音楽を例にとって考えてみると、自然の中のさまざまな生の音は楽曲ではない。ただ音楽的な魂を持つ者にとってのみ、森のざわめきや風の鳴る音や小鳥の鳴き声や小川のせせらぎがメロディーをもつ意味深いものに聞こえる。したがって、「音楽家は、彼の芸術の核心を自分の中から取り出している」のである。では、絵画はどうか。描こうとする対象はすでに画家の眼前にあるわけだから、上述のようなことは当てはまらないように思える。しかし、絵画もまたその本質においては「何物にも依存せず、まったくア・プリオリに」成立しているという。「画家は本来、眼で描く。——彼の芸術は、規則にしたがって美しくものを見る術である。ここでは見るということがまったく能動的であり——完全に形成的な活動なのだ。」

これは、実際に絵が描かれる前に、画家の頭の中で構成されたイメージとしての絵のことを述べていると考えられる。そのような場合、画家は心眼で絵を見ているわけであって、たとえモデルは外界に存在していても、それとは別のものとしての絵を見ると同時に描いてもいるのである。音楽家の場合も同様に、楽譜に書き付けられる前に頭の中で曲想として生じた音のことが言われているのであろう。音楽家もまた、作曲のさいには頭の中で楽曲を聴くと同時に作ってもいるのである。「音楽家も、本来は能動的に聴く。——彼は聴き表わす (heraushören) ののである。」heraushören はノヴァーリスの造語である。聴くということは普通、外の音を内へと受け入れることだが、音楽家の場合は、聴きながら内のものを外へと作り出すのだから、heraushören (外へと聴きいだす) なのである。同様に、heraussehen, herausfühlen という言葉も使われている。「芸術家は、諸々の理念を思いのままに——外部からの要請がなくても——感官を通して流出させることができ——感官を道具として、現実の世界を好きなように作り変えるために使用することができる。」しかし芸術家でない普通の人間も、そのような素質と潜在能力は持っており、それを鍛錬することもできるという。この断片では、聴覚と視覚についてしか述べられていないが、断片の最後に付された「感じることの能動的意味、ポエジー」という言葉には、これらのことにも後に触れようという意図が感じられる。

「能動的使用」は、感覚器官のみならず、思考器官においても考えられている。

「哲学は・・・一つの世界体系を、ア・プリオリにわれわれの精神の深みから考え出す (heraus-denken) 技術であり——思考器官を能動的に使用して——純粹に英知的な世界を描出する技術である。」(II-577-234)

「思考は、花のように造形的な形を与える諸力がもっとも精妙に進化したものにほかならず——普遍的な自然力が尊厳をもったものにすぎないにちがいない。

思考器官は、世界を産み出す部分であり——自然の生殖器である。」(III-476-1144)

思考器官の「能動的使用」の典型的な所産は、それに対応するものが目に見える形では現実の世界に存在しないような、純粹な表象や概念からなる体系、すなわち数学やフィヒテの「知識学」である。

次に挙げる三つの連続した断片は、魔術的観念論の説明として重要であると思われる。その最初の断片(II-583-247)では、思考という機能をわれわれが比較的自由に支配することができるということから、それが他の諸器官の能動的使用の出発点となるということが述べられている。「われわれの全身体は、精神の命ずるままに働くことのできる能力を完全に有している。」このような能力をわれわれが獲得するとき、次のようなことになるという。

「そのとき、人間ははじめて本当に自然から独立するだろう。・・・物質に魂を吹き込むことは人間の思いのままになるかもしれない。——人間は、自分の感官をして、望みどおりの形のものを産み出させ——文字どおり自分の世界の中に生きることができるようになるだろう。・・・彼は、望みのものを、好きな方法で、望みの関係の中で——見たり、聴いたり——感じたりするであろう。」

このような考え方は、外界に対する積極的な働きかけによって、世界を自分の方から変えてゆこうとする精神的態度を理論的に基礎づけるものとなるだろう。さらにこの断片では、フィヒテが言及されている。

「フィヒテは、思考器官の能動的な使用を教え——発見している。ひょっとしたら、フィヒテは、器官一般の能動的な使用の法則を発見したのではなかろうか。知的直観は、それにほかならない。」⁷⁾

7) クーンは、この「知的直観」(intellektuelle Anschauung)を、「フィヒテの絶対的な事行(Tathandlung)」であると解釈している。(Kuhn, a.a.O., S.219)自我がそれ自身を意識すると同時にみずからを作り出すというはたらきを、思考器官の能動的使用と考えること自体は正しい。しかし、ここでいう「知的直観」は、それだけをさすのではなく、フィヒテが「知識学」においておこなっている、哲学者自身が自分の中で起こっている現象を観察し、記述するという方法をも意味していると思われる。事実、ノヴァーリスは、フィヒテの *schaffende Betrachtung* (作りつつ見ること、あるいは作りつつ考察すること)の方法を高く評価している(III-174, III-373-603)が、この言葉は上に挙げた、*heraussehen* などの表現と相通ずるものを持っている。彼が、自然観などでは自分に近いと思われるシェリングよりもフィヒテを好む理由の一つはここにあるのではなかろうか。

次の断片 (II-583-248) では、一般に「われわれが積極的になればなるほど周囲の世界は消極的になる。——ついには、消極はもはやなくなり、われわれすべてが、すべての内に存在する。」と述べられ、さらに「器官の能動的使用」が再び言及される。

「われわれの感官が、思考器官の変容——絶対的な要素の変容にほかならないとすれば——われわれはこの要素に対する支配力によって、われわれの感官をほしいままに変化させ、導くことができるだろう。」

内容的には明らかにこれの続きである次の断片 (II-584-249) では、再び芸術家の話題に戻ってこう書かれている。

「そのように、画家はすでにある程度まで眼を——音楽家は耳を——詩人は想像力と——言語器官と感覚を——あるいはむしろすでいくつかの器官を同時に自分で支配できる。——それらの器官の作用を詩人は合一させて、言語器官か物を書く手へと導いてゆく。——（哲学者は絶対的な器官を支配できる。）——こうして詩人は、これらの器官を通して思いのままに作用を及ぼし、精神界を描写する。——天才とは、諸器官をこのように能動的に使用する精神にほかならない。——これまでわれわれは、個々の天才しか持っていなかった。——しかし、精神は総体的に天才になるべきである。」

ここでようやく、詩人とポエジーのことが触れられる。さらにこの断片でも、フィヒテが「能動的使用」の模範とされている。

「フィヒテは、このような思考によってはじめて個々の理念を実現しはじめた。——思考体系という理念を。だから、この理念に関与しようと思う者は——フィヒテを模倣しなければならぬ。」

『テプリッツ断片』の後に続く時期に書かれた『万般に関する草稿』では、「魔術的観念論」という言葉が何度か使われており、「器官の能動的使用」との関連もいっそうはっきりしたものとなる。

「もし諸君が、思想を間接的（そして偶然的）には知覚可能なものにできないならば、今度は逆に、外界の事物を直接的に（そして恣意的に）知覚可能なものにしてみるがよい。——これは次のこととまったく同じである。すなわち、もし諸君が、思想を外界の事物にはすることができないならば、外界の事物を思想にしてみるがよい。もし諸君が、一つの思想を、独立し、諸君からは分離した——そしていまや自分のものでさえない——すなわち外界に現出する魂にはすることができないならば、外界の事物で逆の操作をおこなって——それらを思想に変えてみるがよい。」

この二つの操作は観念的である。この両者を完全に支配した者は、魔術的観

念論者である。この二つの操作のおのおのの完全性は、もう一方の操作とは無関係ではないのではないか。」(III-301-[338])

ここでは最初に感官、次に思考器官のことが言われている。能動的使用を完全におこなうことができるために、その逆の操作、すなわち外界のものを自己の内部で再生産するような訓練が勧められているのである。

この時期には、感官や思考器官の他に、「宗教的な感官と、道徳的な感官の能動的使用」(III-435-[862])ということも考えられていた。それらは、「生産的」(produktiv)な器官とも言われている。また、次の断片では、魔術的観念論と「器官の能動的使用」との関係が、これ以上ないほどはっきりと示されている。「諸器官の能動的使用は、魔術的で奇跡をおこなう思考、あるいは、身体界の恣意的な使用である。——というのは、意志は、魔術的で強力な思考能力にほかならないからだ。」(III-466-1075)

「器官の能動的使用」によってこのように新たな世界を自分の中から作り出す「魔術的観念論」は、当然予想されることではあるが、この後の時期に至って思考や想像力で一つの世界を作り出すポエジーと深く関係づけられることになる。「詩作はおそらく——われわれの諸器官の恣意的、能動的、生産的な使用にすぎない。——ひょっとすると思考そのものも、これと大して違わないもので——したがって思考と詩作は同一のものかもしれない。」(III-563-56)

以上で、「諸器官の能動的使用」の意味とそれが上述の「理念」と同一視される理由が明らかになったであろう。実は『テプリッツ断片集』の中にも次のようなヒントがないわけではなかった。

「自己を感覚すること——自己を思惟することと同様——能動的に感覚すること。ひとは感覚器官を、思考器官と同じように制御するようになる。」(II-606-64)

では、なぜこの魔術的観念論が、テプリッツ断片集の中にあるのか。問いを言い換えれば、「日常生活の哲学」と魔術的観念論は、どのような関係にあるのか。その答は、すでに上の説明の過程で得られたように思われる。前者の一つの態度として、対象に能動的にかかわってゆくということをはじめに挙げたが、後者はそれに哲学的な根拠を与えるのである。すでに引用した表現を再び用いれば、魔術的観念論は、「文字どおり自分の世界に生きることができるようになる」方法を教え、「われわれが積極的になればなるほど周囲の世界は消極的になる」ことを理解させるのである。また、「日常生活の哲学」のもう一つの面である、平凡なものに高い意味を見出すということもまた、思弁や想像によってみ

ずからの世界をまず作り出し、外界をそれによって作り上げるという「器官の能動的使用」の初歩のようなものだと見られなくもない。このように、「日常生活の哲学」は、魔術的観念論を、まずは手始めとして身近なことに応用したものと考えてすることもできる。

「本来の哲学は、生活の受動的な学に属している。——それは、この生氣ある生活とは対立する、自然的な結果である。——しかし、われわれの魔術的な発明の力の自由な産物ではない。」(II-603-362)

これは、『テプリッツ断片集』の中にある一節だが、「生氣ある生活」(Lebeleben)という造語で表わされている「日常生活の哲学」による生き方が、「魔術的観念論」とかかわりを持っていることを暗示しているように思われる。

結 び

『テプリッツ断片集』の特色は、先に出版された断片集『花粉』、あるいはその草稿ともいえる『種々のことに関する記述』と比較することによっていっそう明らかになるだろう。『花粉』は、非常に多彩なテーマを扱っており、その発言も大胆である。「死は一つの自己克服である。」(II-414-11)というようなことが事もなげに述べられている。この断片集は、教養を求める読者のために、さまざまな思考の可能性を最大限に広げてみようという意図のもとに書かれたもののように思われる。叙述の仕方は、抽象的、観念的である。『テプリッツ断片集』は、これまで見てきたようにさまざまなテーマを扱ってはいるが、『花粉』に比べればずっと狭い範囲に限定されており、日常生活を中心としたものにまとめられている。「われわれの日常生活が象徴しているものは何か。それは維持のプロセスである。」(II-601-354-35)と言われているように、この断片集は、堅実な実生活をいとなむ上での考える材料を読者に提供しようとしているように思われる。叙述の仕方は、より具象的になっている。このような違いは、ある程度著者自身の精神状態の反映であるとも考えられる。前者は、ゾフィーの死後、自殺まで考えていた時期からまもない頃に書かれ、内面に向かう傾向や死への親近感が強く現れている。後者は、親しい人々の死の衝撃からようやく立ち直り、これから再び実務と研究の生活に帰ってゆこうとする時期に書かれ、健全な意志が感じられる。

もっとも、両者の共通点もないわけではない。『花粉』の中にある次の断片では、ありふれたもの価値を見直そうという考えが表わされており、『テプリッツ断片集』で展開される「日常生活の哲学」への導入を思わせる。

「われわれが、普通のものや卑俗なものに非常に多くの力と努力を必要としてい

るのは、もしかすると、本来の人間にとって、哀れな日常性ほど非日常的で——卑俗でないものはないからではなからうか。

最高のもののもっともわかりやすいものであり——もっとも近いもの、もっとも必要なものである。われわれ自身についての無知——自分自身から離れているということからのみここで不理解が生じるのであるが、このような不理解はそれ自体が不可解なのだ。」(II-414f.-12)

『花粉』ではまた、次のようなことも述べられていた。

「自分を他に委ねることは、すべての軽蔑の原因であるが、逆にすべての真の向上の根拠でもある。第一歩は、内面へのまなざし——すなわちわれわれの自己を他から切り離して見つめることであろう。しかし、ここで立ち止まる者は中途半端に終わる。二歩目は、外に向かう活動的なまなざし——すなわち、外界の能動的で慎重な観察でなければならない。」(II-422-26)

しかし、実際には『花粉』では、「第一歩」に属する内面への道や超感覚的知覚の可能性などが強調されすぎたきらいがあった。そこで、「外に向かう活動的なまなざし」の部分の補完し、均衡を回復する必要があったのである。観察と記述、考察と実践からなる「日常生活の哲学」は、それを実現すべきものとしても構想されたと思われる。

「日常生活の哲学」はまた、ロマン派の文学理論にも通じるものを持っている。なぜなら、同じ時期に書かれた断片の中に次のような一節があるからだ。「世界はロマン的なものにされなければならない。そうすればひとは根源的な意味を再び見出す。……卑俗なものに高い意味を、普通のものに秘密めいた見かけを、既知のものに未知にももの威厳を、有限のものに無限のような外観を与えることによって、私はそれらをロマン的にする。」(II-545-105)

『テプリッツ断片集』では、普通は軽く見られがちでありふれた平凡なものに高い意味を見出すということがなされていた。それは、上のような「ロマン化」(Romantisieren)の理論が日常生活のさまざまなことどもに応用されていると考えられるのである。こうして、食事は「追想の食事」、「自然の守護神を享受する」行為となり、目覚めは遊星の意識となり、睡眠は日ごとの「死」となり、日々の生活全体は「勤行」となる。しかし、このような意味づけは、もともとなかったものをわれわれが無理に付け加えているのでもないし、勝手に思い込んでいるのでもない。上の断片によれば、そのような高い意味は、対象そのものにもともと備わっているのであって、われわれはおりにふれてそれを再発見するだけなのである。問題は、われわれ自身のものを見方にあるのだ。

「精神の世界は実はわれわれに対してすでに開かれている。——それはいつも明

らかなものなのだ。——もしもわれわれが必要な程度に弾力的になるならば、われわれは精神の世界のまん中にいることだろう。」(III-301f.-341)

非常に重要なもの、程度の高いものがありふれたものと通じているという考え方は、『テプリッツ断片集』の次の一節にも表わされている。

「ひょっとすると、最高の本は、入門書に似ているのかもしれない。一般に、このことは、本についても、すべてのことについても、また人間についても言えることである。」(II-610-401)

普通のものに高い意味を見出すだけでなく、この断片集では、病気や悪のような、ふだんは否定的にしか評価されていないものにも新しい意味づけがなされ、再評価がおこなわれていた。

「悪いもの、平凡なもの、卑俗なものの哲学は、きわめて重要であろう。」(II-598 f.-340)

このように、周囲のものに対する従来の見方を変えることによって、その対象を生氣づけ、われわれ自身もまた日々の生活を生き生きといとなむことができるというわけである。

「日常生活の哲学」のもう一つの特徴は、「みずからによって作られた生活」という言葉に表わされるような、対象に対する能動的な態度であった。それは、社交や気分に関する断片にも現れていた。魔術的観念論、すなわち「器官の能動的使用」は、そうした実生活における能動的な生き方をつきつめていったところにあるとも言えるのであり、両者は、理論とその応用、実践という関係にある。事実から観念を取り出すのではなく、観念を事実へと作り直そうとする方向性において、両者は共通している。日常生活という最も实际的で具体的なものと、魔術的観念論という、きわめて思弁的に見える思想が、こうして大きな切れ目もなく連続しているのである。このように、理論と実践、自己の内なる思想と外界へのその反映が密接なかかわりを持ち、両者のあいだにつねに往復通行が要求されているというところに、ノヴァーリスの考え方の大きな特色があると言えるだろう。